

2022.5.19 (木)
第36回例会
(通算3663回)

2020-2021年度 釧路ロータリークラブ会報

会長スローガン『我がロータリーを楽しむ。我が地域を育む。』

第85代会長 杉村 莊平
副会長 浅川 正紳
幹事 市橋 多佳丞
編集責任者 クラブ会報雑誌委員会

例会日 毎週木曜日 12:30～13:30 夜間例会 18:00
例会場 釧路センチュリーキャッスルホテル
事務局 釧路市錦町5-3 ミツ輪ビル2F
☎ 0154-24-0860 📠 0154-24-0411

2021-2022年度
国際ロータリーテーマ



奉仕しよう みんなの人生を豊かにするために

2021-2022年度
RI会長 シェカール・メータ
第2500地区ガバナー
漆崎 隆 (釧路ベイRC)

月間テーマ	青少年奉仕月間
本日のプログラム	講師例会「いよいよ新時代へ～スポーツの力で切り拓く釧路の未来～」(担当：プログラム委員会)
次週例会	夜間例会「ロータリアン格付けチェック NIGHT」(担当：親睦活動委員会)

- ロータリーソング：四つのテスト
- ソングリーダー：藤井 敬亮君
- 会員数 102名
- ビジター なし
- ゲスト なし

会長の時間 杉村 莊平会長



皆さん、こんにちは。本日も多数のご出席をいただきまして本当にありがとうございます。釧路もやっと暖かくなってきた感じが、できればこのままコロナ前の生活のような形に戻って、観光客も戻り経済活動も以前のように戻ってくれればと思っている昨今です。

そう思って新聞を拝見していましたら、2つほど釧路地域に関する気になる記事がありましたのでご紹介したいと思います。

1つは、今日の中島さんの話にも出てきますが、弟子屈町のお話で「弟子屈町で地域課題を民間ベースで解決して行こう」と、街づくり会社がつくれワインやチーズを作ったり、ふるさと納税の事務代行などを行って地域活性化に取り組むという記事が出ておりました。最近、例会でもご案内をしました川湯温泉駅前の活性化や川湯温泉街の再開発計画など、人・物・金が確実に弟子屈町に集まってきているような感じがしております。第2の富良野・ニセコのように思ってくれればと思って、とても明るい記事だと期待をして読みました。

もう1つ、これは真逆のことで、わが釧路市に関する記事です。4月末の人口が16万1,855人で、前年比2,700名ほど減少しているということです。分母が小さくなってきているのに人口減少がなかなか止まらないということで、20万人を切ってしまうと心配をしていたのがついこの間のような気がします。それから4万人も減少してしまっています。あまり暗い話をするのは良くないかと思えますけれども、逆に臭いものにフタをして見て見ぬ振りをするのが一番よくないと思います。われわれの活動も地域あつての活動ですので、改めてこの現状をしっかりと見て、危機感を共有して地域活動に取り組んで行かなければと思っている今日この頃でございます。

私も若い頃から多少地域活動・街づくり活動に携わっておりまして、振り返って見ると、フォーラムや市長に提言などのようなことは結構行いましたけれども、その先になかなか辿り着けないのが課題であり、思うに街づくり活動というものは最終的には自らリスクを負って具体的な行動にたどり着く、具体的な行動を起こしていくことが大事で、そのような人間が何人も現れてくる街こそが活力がある街になると思っております。話が長くなりましたが、何を言いたいかというと、今日の講師の中島さんこそがまさに自らリスクを負って具体的な行動を立ち上げた方でございまして、私の知っている限りではアイスホッケーの選手で釧路

に戻ってから苦勞をして自分の仕事を立ち上げたいうえで、スポーツに関する街づくり活動をずっと続けて来られ、今回の大きな成果に結びつけた方だと思っております。昨今、元気がないこの釧路において、われわれ地元の間が傍観者にならず、いかに地域活性化の主体者になれるかが大事なことだと思います。今日の中島さんのお話を聞けば、そのヒントをいただける最適な講師であると思っております。本日の講演を楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

幹事報告 市橋多佳丞幹事

皆さま、こんにちは。幹事報告をさせていただきます。他クラブの今週の例会は、お手元にお配りしております例会案内をご覧ください。



昨日、6月の例会スケジュールを皆さまに送付させていただきました。その中で、6月2日にクラブアッセンブリーを夜間に行う予定です。ご案内は本日、皆さまに送付の予定となっておりますので、ぜひ多くの皆さまのご出席をお願い申し上げます。

また、6月4日土曜日に『野遊会』を行う予定となっております。場所は『岸壁炉ばた』にて開催させていただきます。本来であればバス等をチャーターして、皆さまと1～2時間程度の旅を楽しむところでございますが、コロナ禍ということもありましてバスでの移動は避けて、現地集合・現地解散となります。MOOの岸壁炉ばたへ、多くの皆さまでお集まりいただければと思っております。こちらのご案内を本日もしくは明日には配信できると思っておりますので、よろしくお願いいたします。

■本日のプログラム■

講師例会「いよいよ新時代へ～スポーツの力で切り拓く釧路の未来～」

クラブ運営委員会 中島 徳政委員長



プログラム委員長が欠席のため、本日の例会の講師を改めてご案内させていただきます。会長があれだけ喋ると、喋ることが一切ない感じ

でございますが。本日の例会は、『いよいよ新時代へ～スポーツの力で切り拓く釧路の未来～』ということで、NPO法人東北北海道スポーツコミッション理事長の中島仁実様をご講師でございます。つい最近、釧路町に『あしはらの杜』という施設がで

きまして、そちらの運営をされています。それでは中島様、よろしくお願いいたします。

NPO法人東北北海道スポーツコミッション 理事長 中島 仁実様

皆さんこんにちは。東北北海道スポーツコミッションの中島でございます。本日、『いよいよ新時代へ～スポーツの力で切り拓く釧路の未来



～』というテーマでお話をさせていただきます。釧路クラブの例会にこうしてお招きいただきまして光栄でございます。杉村会長、市橋幹事をはじめ釧路クラブの皆さま、本当にありがとうございます。本日、頑張っていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

それでは、私の紹介をしていただきましたが、簡単に私の方からも自己紹介をさせていただきます。

1974年釧路生まれの48歳です。ずっとアイスホッケーを続けまして、2001年にコーチのライセンスを取ろうとカナダのバンクーバーに渡りました。人生設計もいろいろと変わりまして、2003年、バンクーバー現地に刺繍プリントを行うユニフォームの製作会社を設立しました。その後、永住権も取ってずっとカナダに住んでいようと思っていたのですが、2011年、東日本大震災で、メルトダウンで「もう日本には住めない」と言って日本の方々が西海岸にもものすごく流れて来たのを見て、私には親も仲間もいるこの釧路にやっぱり戻らなければダメだという気持ちになりまして2013年に帰国。そして、ユニフォーム製作の会社、現在文苑にあります株式会社プロパフォーマンスを設立しました。その3年後に仲間と集まって、スポーツで地域を盛り上げるという「東北北海道スポーツコミッション」を設立することになりました。

私たちは、これは昭和からのキーワードだと思いますけれども『体育からスポーツへ』という本当に日本にとって大切な部分だと思いますけれども、元々日本のスポーツは軍隊を強化するためにできたものが日本のスポーツの原点です。第二次世界大戦後、それが「体育」という形で受け継がれましたが、現代の先進諸国、特に先進諸国のスポーツと比べると非常に矛盾が多く、日本政府でも「何とかこの矛盾を解決しよう」と様々な取り組みを行います。

2004年、文科省が主導になって『総合型地域スポーツクラブ』を立てる試みをします。これはやっぱり部活動。どちらかというと部活動は、軍隊的状況の昭和の時代のスポーツだったので、地域に移行しようと取り組みをするのですが、上手くは行かなかったことに

なります。

地域スポーツクラブとはどのようなことかという、欧米各国のように多種目・多世代・多志向、「いろいろな種目をやりましょう」「いろいろな世代の人たちが楽しみましょう」、そして、ここがすごく大きな違いですけれど「プロを目指す人も、楽しむ人も、いろいろな志向を網羅しよう」というのが総合型地域スポーツクラブです。

これによってスポーツ人口をどんどん増やしていこう、健康国家になろう、と目指したのですが、どうしても馴染みが生まれず、地域スポーツクラブは作られては潰れ、作られては潰れ、と上手く行かなかったなっています。2010年には、スポーツ立国戦略の下で『観る、する、支える』というテーマで国が取り組むのです。

こちらはスポーツ実施率というデータで、「週1回以上スポーツを行う人」が何%いるかという、全国で2割もいないのです。80%の人が「スポーツは行わない」、もしくは「あまり好きではない」、もっと言えば「全然好きではない」という方々が8割いるのに、『観る、する、支える』はスポーツを行う側の目線だったと、いま僕自身もそう思っています。やはり8割の人に『観たくなる、したくなる、支えたいくなる』というアプローチが必要だったということで、この取り組みもあまり上手くは行っていなかったと思います。

2016年は『スポーツ省』ができた年です。この年「スポーツで稼ぐ」と明言しました。これはまさに産業化を目指して経済を活性化しようとしたのですが、これもあまり上手く行かなかったと思っています。

参考資料で、これは日米の比較です。左は人口の比較、約3倍でずっとこの20年推移しています。真ん中GDPの比較、これは4倍程度でずっと推移しています。アメリカと日本の国の大きさ的にも妥当というところです。右が日米のスポーツ産業比較です。1998年では同じく3倍位でしていたが、この18年の間になんと12倍に差が開く。このようなデータがあります。

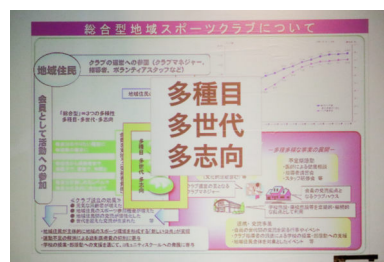
また、左のグラフ、プロ野球市場規模です。1995年で、市場規模がメジャーリーグと日本のプロ野球市場規模はほぼ同じだったのですが、15年間のうちに約3.7倍に差が開いている。右側のプロサッカー市場規模は、イギリスのプロリーグ「プレミアリーグ」とは1996年の時点で、市場はほぼ同じだったのが、16年間のうちに4.5倍と日本のスポーツ産業はものすごく先進諸国に遅れをとったと言われています。これが、私が住んでいた北米のスポーツ施設です。ご覧のとおり野球会場、バスケット会場、その裏には食べたり飲んだり遊んだり、すごくいろいろな所でお金を使う仕組みができています。

これは日本製紙アイスアリーナです。この規模の施設ですら、お金を使う所は自動販売機と小さい立ち食い

そば屋が1軒。まさにお金を使う場所がないという矛盾があったのです。ですから左側の方は試合に興味がなくとも楽しめるスタジアム。いま日ハムの『ボールパーク構想』がこの考え方を取り入れようとしています。

日本の施設は、ほとんど教育委員会管轄の教育施設となっているので、「産業化」を謳っているけれど、教育の一環となると常にこの矛盾は解決できず、利益を生む施設・利益を生まない施設がはっきりしていて、産業化は上手く進めていないのが現状であります。

また、さらに「スポーツで稼ぐことは地域にとっては悪だ」と、このように僕は感じています。皆さんがそう思っているだろうと感じています。つまりスポーツは美学であり美しいもので、「スポーツを食べ物にしてお金を稼ぐなんて」ということがとても根強く残っていて、これがまさに体育であった弊害と思っ



ています。決してお金を稼ぐことは悪いことではなく、産業化とは消費を生んで、そこに雇用を生む、そしてその余剰金で子どもたちの育成環境を整えて、施設を修繕していくという目的ですけれど、どうしてもこの「悪」というところが抜けきらず産業化が進まない現状であります。

2017年には、スポーツ省が「スポーツコミッションをどんどん立てて行こう」という動きを始めます。これは見づらいですけれど、2020年東京オリンピックが決まった時にスポーツ省は「170団体、全国のスポーツコミッションをつくっていきましょう」という動きをしていました。われわれは結構早めにできあがったのですけれど、170団体いろいろ各地でできてきました。これも実はあまり機能しませんでした。というのも、あるイベントやある大会を誘致するためだけにできあがったコミッションなり協議会は、その大会が終わった後に結局尻つぼみになってしまう。名前だけになってしまう。

その当時、スポーツ省の審議官も言っていましたけれども、持続的に街に効果をもたらすスポーツコミッションでなければならないのですが、その活動ができていないのは私たちもそのようにお褒めをいただきましたが、日本全国でも数少ない。やはり、スポーツで街を活性化していくコミッションがどんどん増えてほしいと言われておりました。日本のスポーツを変えようと政府はいろいろ頑張っていて、ことごとく失敗。と言うとおこがましいですけど、上手く行かなかった中で2019年12月、ついに『まち・ひと・しごと総合戦略』・地方創世にスポーツという文言が正式に取り入れられることとなります。

これはわれわれにとってすごく大きな進歩だと。単に趣味・娯楽であったスポーツが街の地方創世に一肌脱ぐという位置付けになったことはすごく大きな一歩だと思いました。いまたくさんある地域の社会課題をどうやってスポーツで解決できるかに目線が行くようになります。

例えば、学校部活動の限界。こちらは平成21年の全国アイスホッケー大会のトーナメント表です。この当時はほぼ全部、単独校で出ています。ただ、平成27年の大会表を見ると単独校は景雲中学校と鳥取中学校のみ、景雲中学校もついに昨年合同になってしまいました。アイスホッケーに限らず、どこの高校も中学も単独校で出ることが難しくなってきました。これ、何が一番問題かと言いますと、チームによっては9～10校の合同チームになる。この9校の中の1校が1人の部員であっても1人の顧問を付けなければならぬ。働き方改革を政府が謳っているのに1チームのアイスホッケーに10人の顧問がいる。ものすごく矛盾した状況になっている。また、1回の練習をするのに9校から親御さんが送迎をしなければならない。つまりもう部活動としては完全に崩壊をしている。これはメスを入れなければならないというところです。

また、少子高齢化による税収減ということで、2019年度の人口で、60歳以下は76,000人が65,000人を支える図式がしっかりできていたのですが、2040年度になると40,000人が54,500人を支える時代が当然やってくるようになります。これは街にとってはとても深刻な問題だと言えるかと思えます。

また、高齢者の介護医療費の財政圧迫です。このグラフ、青が平均寿命、赤が健康寿命、その差が不健康な期間になります。全国平均では男性9.13年、女性12.68年となっていますが、釧路を見てみると男性13.8年、女性18.9年、この期間が不健康な期間になる。つまり財政が圧迫されているのに介護医療費をどんどん投入して行かなければならない。これも街にとって非常に深刻な問題と言えるかと思えます。

また、地域共生社会の実現とよく言われていますけれど、社会的弱者と呼ばれる生活困窮者、生活保護を受けている方、そして高齢者、障害者、そして子どもたち。この社会的弱者の方々を包括的に支援していかなければならない。これはどこの市町村も掲げるひとつの社会課題だと言えるかと思えます。

このようないろいろな地域の問題をスポーツの力で解決していこうと、それが『まち・ひと・しごと総合戦略』に入った一番の国の目的であり目標であります。趣味・娯楽であったスポーツが遂に街を変える力があると。

私たちも、単にスポーツ振興・アイスホッケーを盛り上げようではダメだな、これから自分たちで街のため

に何ができるだろう、と考えるようになりました。そこで、東北北海道スポーツコミッションが様々なアイデアを出しながら、いろいろな取り組みを考えていくわけです。

そもそもスポーツコミッションとはどのような団体なのか。「スポーツを通じた地域振興を目指す組織」が定義です。具体的にいうと、いろいろとありますが、赤文字で書いてある「スポーツ振興」と「スポーツツーリズム」、つまり合宿・大会誘致を行ってたくさんお金を落としてもらおう。これがスポーツコミッションの最初の構想でした。ただこれは最初であって、やっぱり持続的にいかなければならないので、これだけで立ち上がったコミッションは結構各地でも潰れていたり、活動をしなくなったような団体も非常に多いようです。

簡単に図で説明をすると真ん中のパズルの所、スポーツ団体・行政・NPO・観光業者というところがタグを組んで、地域の組織を作って、大会・合宿を誘致して、右側の「スポーツを通じた地域の活性化」、つまり経済活性化につなげて行こうということが、このスポーツコミッションの考え方の最初でした。

私たちの東北北海道スポーツコミッションも、そのアイデアに自分たちで共感をして、「カナダの高校生を呼ぼうではないか」というのが最初の活動でした。私がカナダで指導者の勉強を行っている時に、日系カナダ人、ルーツを日本に持つ親御さん、お爺ちゃんやお婆ちゃん、その子どもたちが作る日系カナダ人高校生アイスホッケーチームと知り合って、「監督をやってくれないか」と言われて監督をやった時に、日本遠征の企画をする際に「ぜひ私の故郷である釧路に行かないか」と声をかけたことがこの事業の始まりでした。

写真の下は、その時に何十年ぶりに集まった仲間たちが「ぜひ手伝おう」と、この事業を手伝ってくれました。そこがこのスポーツコミッションの事業の始まりで、仲間たちが集まってスポーツコミッションの設立に向かって行くことになります。

この事業事態は、単にアイスホッケーの試合をするだけではなく、せつかく1週間滞在してくれるのであれば、ホームステイをさせてみたり、いろいろな学校を訪問して剣道など武道の体験をしたり、いろいろな文化を学んでもらう、という取り組みをしました。どうしてもアイスホッケーの大会で来ると、アイスホッケー選手としか交流をするタイミングがないのですけれど、ではなく、地元にいるいろいろな高校生にこの経験をしてほしいという思いでこの企画をしました。また、『霧フェス』に参加をさせていただいたり、ルーツが日本ということで運動会を開催したり、いろいろな経験をさせていただきました。1週間、一行にはとても楽しんでいただきました。

これは官公庁の資料です。住んでいる人1人平均で

年間に125万円を平均で使うそうです。それを外国人観光客8人が来ると、人口1人が減る。その分をカバーできると官公庁が算盤で弾きました。われわれも、これで経済効果が生まれるだろうというのが最初でした。実際1週間このプログラムを行った後に、ものすごい数の人たちが関わって、ものすごい人たちが「素晴らしいプログラムだった」と1週間ずっと笑顔でいたのを見た時に、われわれが考えていた経済的効果以上にこの街にもたらした社会的効果がとても大きかったと私たち自身が実感しました。スポーツコミッションの最初の定義では、みんな経済的な効果をもたらそうと活動をしますけれど、それに影響を受けた子どもたちの中では、カナダに留学をしてカナダ人と結婚をした子もいるので、今でも連絡を取っています。その意味ではグローバル化の手助けにもなったり、子どもたちの経験に寄与できたところは私たちの活動がこれからどんどん変わっていく機転になったのかと思います。

本格的な活動を行っていきこうと、まなぼっとの横に『坂の上会館』という閉館が決まった旅館に、「ぜひお貸しください」とお願いをして、スポーツ合宿所の運営をスタートしました。夏場合宿を誘致しても長期滞在者がたくさんいてホテルが満室ですから、どうしても「誘致をしても宿泊場所はありません」という矛盾した状況が続いていた中で、この合宿事業に一步進むことになりました。

その経験を活かして先月、釧路町の運動公園内に『B型就労支援事業所 Villa あしはらの杜』という合宿所をオープンさせていただきました。こちらはスポーツ合宿所と一般も営業できるレストランです。ここで働いている人たちに障害者の方を雇用させていただいております。私たちが考えたことは、地域が抱える福祉の課題を何とかスポーツで貢献できないかという思いで、自分たちの合宿所運営の経験も活かしながらこの『B型就労支援事業所 Villa あしはらの杜』を立ち上げる計画に行き着いたわけです。

また、『くしろウインターパーク』も運営をさせていただきました。この目的は、どうしても寒い冬、観光コンテンツが非常に少なく観光事業が見込めない。また、寒いので引きこもりがち、子どもたちは寒いので家でずっとスマホやっている。「健康については問題だ」というこの季節に国際交流センターの前の遊歩道を凍らせてイルミネーションできれいに飾って、日本初の周遊型アウトドアリンクを作ることにして、2年運営をさせていただきました。残念ながらコロナの影響で自分たちの目標の数字はまだ達成できていませんが、こちらも市民の健康維持という社会課題、そして冬場の観光で釧路の冬のメインコンテンツになり得るだろうという思い、信じて活動しております。そのウインターパーク内にスケートダウンヒル競技の

体験ができる場所を作っております。スケートダウンヒル競技とは何かです。単にアイスホッケーの格好をした人間がスキーと同じようにダウンヒルで競争をするのですけれども、実はこれをいまオリンピック正式種目に申請をしております。『2030年札幌オリンピック』が決まりそうな時ですから、われわれもすぐ考えて、アイスホッケー・カーリング・女子アイスホッケー・フィギュアの全部を考えてもおそらく釧路には何の競技も来ないだろうと仮定しました。せっかくのオリンピックが釧路に来ないので、僕らがテレビを観ているだけでは街に何も影響が生まれません。ということであれば、この競技がオリンピック種目になってくれることを信じて、この競技をいち早く取り組もうと、このコンテンツをウインターパークの中につくらせていただいています。何とかオリンピック誘致ができればと、いまから種を蒔いているような状況でございます。そして、私たちはスポーツ庁の補助金をもらって動き始めてはいますけれども『釧路ヴィエルマキ構想』という構想があります。ヴィエルマキとはフィンランドの人口450人の街の名前です。この450人の小さな村に国の政策で体育施設・トレーニング施設・ホテル・勉強会場のすべてをここに集約して、世界中のいろいろなアスリートがここで育成できるような育成拠点をつくっています。通年を通して人がワンサカ集まるような街がこの450人のヴィエルマキという街です。それを見た時に、「釧路でこれができないか」がこの釧路ヴィエルマキ構想でした。アイスホッケー競技におけるこのアジアは、世界に比べてものすごくレベルが低いです。このアジア地区を強くするという大義名分の下に、選手・レフリー・指導者・トレーナー、すべての人がこの釧路に来て勉強をする。原則コミュニケーションを英語で、いろいろなメンタル・フィジカル・ドーピング・栄養学、様々なものを学ぶために毎年ここに集まるという仕掛けができないかということがヴィエルマキ構想です。

さらに、そこで勉強をした人たちが様々な提携先の海外の強豪国に行ける図式ができれば、黙って1年中を通して釧路に人が集まる仕組みができる。これが経済的な面から見ても、人材育成という面から見ても、街に大きな効果をもたらす事業ではないかと思って活動しております。

ちなみに、2012年、安倍首相が公言したこの青文字で書かれている『スポーツを通じた国際協力・交流』、『人材育成拠点の構築』、『アンチ・ドーピング推進体制の強化・支援』、まさにこれ1つだけでも網羅していれば安倍首相に認定をされる仕組みでした。この釧路ヴィエルマキ構想は政府の構想すべてを網羅するスーパープログラムだと自分たちでは考えております。

その他に、このヴィエルマキ構想を含めてですけれ

ど、世界中から子どもたちが集まってここで試合をしたり、いろいろな活動をしたり、交流をしたりすることを世界にネット配信することができれば、その家族・友達・様々な人たちが見てくれるだろうと思いました。そのために『北海道スポーツチャンネル』を運営して、ついでに釧路のいろいろな魅力を同時発信していきたいと活動もしております。

また、お手元にあるかと思いますが、様々な活動で頑張る子どもたちのモチベーションアップにつなげようと『Member+Over (メンバーオーバー)』というフリーペーパーを発刊しております。こちらは幼稚園から高校生まで約 35,000 人全員の手に渡るようになっております。

私がカナダにいる時に一番思ったことは、大人がスポーツを楽しむ環境がしっかりできているために、スポーツを楽しんでいるお父さんを見て子どもがアイスホッケーを始めたりサッカーを始めたり、と。日本のスポーツを、社会人のスポーツを生業化して行かなければスポーツは振興しないし普及して行かないということで、アイスホッケーのビアリーグも運営しております。

最終的には、私の目標でもあります。これは『スヌーピー』の原作者、チャールズ・M・シュルツさんを追悼するオールドタイマーの世界アイスホッケー大会。カリフォルニアで毎年行われます。釧路でこのようなビアリーグアイスホッケーだけではなく様々なスポーツのビアリーグが開催できればと考えております。という感じで様々な活動を行って参りましたが、ここでものすごい私たちの活動の追い風になるニュースが先月、飛び込んで来ました。「中体連が要件緩和」ということで、学校単位で固執をしていた中体連がついにクラブチームの参加を認めるビッグニュースが出てきました。僕はこれを戦後最大の改革だと思っております。

先進諸国のスポーツは元々学校スポーツ単位でした。それに限界を感じた時にしっかりと地域に移行させました。それぞれの地域が、Aリーグ・Bリーグ・Cリーグとそれぞれに目的があるリーグを作る。プロを目指したい人・競技を楽しみたい人・運動を楽しみたい人、すべての人の志向を網羅するには地域移行がないとできない。日本はとてもこれに遅れた所で、総合型地域スポーツクラブが中体連の要件緩和によって実現性が出てきたわけです。

地域スポーツクラブができれば部活動の子どもたちはもちろん、高齢者が体を動かす場所が増えることになると思います。そうすると介護医療の問題、健康寿命

の問題も解決することも可能になると思います。また、地域スポーツクラブを行政目線で見たときに、人口が減っていくと街はコンパクトにしていくべきと言われています。そして、その中核となる空間とは『スマート・ベニュー概念』といって、地域の既存になる施設を使うべきだと言われています。まさに地域総合型スポーツクラブができることによって、そこがスポーツ・英語教室・カラオケ教室・囲碁クラブなどすべての市民の憩いの場になる要素を持つことによって、この中核となる交流空間をつくることのできる。つまり地域が抱える社会課題をスポーツと地域がコラボレーションすることによって介護医療費削減・子どもたちの健康増進・学力増進・トップアスリート育成、スマート・ベニュー化による地域の利便性向上・地域コミュニティの確立、このような社会課題の解決が可能になると思っております。

地域が持つ様々な資源にスポーツを掛け合わせることで、社会課題を解決し地域を活性化することのできる。つまりスポーツを活用した地方創世ができると思います。趣味・娯楽であったスポーツが釧路の未来を切り開く力を持っている。まさに釧路の未来とは釧路の子どもたちの未来であると思っております。これからもこの地域のためにスポーツを最大限に活用して、この町に元気をもたせられるように頑張って参りたいと思っておりますので、皆さまのご支援・ご声援をよろしくお願いいたします。

ご清聴ありがとうございました。

会長謝辞 杉村 杉村 莊平会長

中島さん大変素晴らしいお話を本当にありがとうございました。あっという間の 30 分でして、皆さんもワクワクしながらご覧になったと思います。

こうして見ると釧路もまんざらでもない。夢があると考えられるのではないかと思います。中島さんが言うように、スポーツで稼ぐと言いますか、社会課題をスポーツで解決することがやはりキーワードなのだろうと思います。われわれとしてもスポーツに限らず、当初に言ったように地域課題を民間ベースで解決することにリスクを負って考えていくことが大事になるのだろうと思っております。アイスパーク構想もありますし、われわれもぜひ協力できるところは協力をしながら夢のある釧路づくりに邁進をして行きたいと思っております。本日は、本当にお呼びして良かったと思っております。ありがとうございました。

本日のニコニコ献金

■杉村 莊平君 例会出席者が戻ってきたことを祝して

今年度累計 535,000 円